（研究論文）

ベトとドクの発達に関する事例研究（Ⅰ）
―「健康な」結合双生児時代―

藤本　文朗

A Case Study of the development of Viet and Duc (1)
— In the Days of Healthy Conjoined Twins —

Bunro Fujimoto

要約
ベトとドクは、アメリカがベトナム侵略戦争で使用した枯れ葉剤によると考えられる原因によって結合双生児として生まれ（1981年2月24日）、6才の時兄ベトが脳炎にかかり、日本で治療したが、ベトは重症児となった。7才の時、ベトナムで2人の分離手術に成功（1988年）、以降兄は重症児、弟は足が一本の障害児として発達してきた。2006年、弟ドクは25才で結婚、自立することとなった。2人の発達は世界的にみても貴重なデーターである。2人は生後から5才まで結合双生児時代は「健康な」発達ともいえよう。小論は二人に21年間かかわってきた筆者がその発達に関する事例研究としてまとめたものである。（Ⅰ）では、いわゆる「健康な」結合双生児時代（0才～5才）について論述した。

キーワード：ベトとドク　結合双生児　枯れ葉剤（ダイオキシン）
結合双生児用車イス　結婚

2006年8月28日受理（実践研究）

Ⅰ　はじめに

2006年5月26日ベトとドクの主治医師であるタン先生が私の自宅に訪ね、ドクからの筆者あての手紙をわたされた（ベトナム語）。

藤本文朗先生へ。お元気でしょうか。僕もベトも元気です。これまで、僕とベトのために長年にわたり支援をいただきありがとうございます。ベトにかわってお礼を申し上げます。ところで、朗報があります。僕は結婚することを決めました。相手の女性はチュエンさんというベトナム人女性です。24歳で専門学校生です。性格は温厚で勤勉な人です。自営業の実家の仕事を手伝う合間に、勉強を続けています。ツーヅー病院やチュエンさんの両親も、私たちの結婚を心から祝福してくれています。これまで支援をしてくださった、藤本先生をはじめ日本のみなさまにご報告するとともに、ベトナムでの結婚式にきていただき、私たちの門出を祝福していただきたいと思います。
グエン・ドク

筆者は自分の息子の結婚の様にうれしかった。それと同時に、ベトとドクの発達を21年間見つづけた中で1つの発達の節目を見い出したのである。ドクは生れてはじめて病院から出て結婚して新居をかまえ、自立していくのである。ベトとドクはこの26年間、死と何度もむかいあい、それをのりこえて発達してきたといえよう（写真1参照）。

筆者がベトとドクに初めて出会ったのは1985年2月28日である。筆者がこの年の4月のベトナムの在外研究員（文部省）として障害児教育、戦争、アジアの発展途上国をキーワードとして留学しての後半、ホーチミンのツーヅー病院を訪ねた時である。

この時の様子を次の様に記している①。

二月二十八日の朝、私はツーヅー病院の二階でベト

ちゃん・ドクちゃんにあった。

看護婦さんとともに二人は、ワゴン車の上にのせられて病棟の廊下を移動してきた。私が日本から用意してきた、パンダのおもちゃをわたすと二人が取りあう。インスタントカメラで写した写真をわたすと二人で奪いあう。そしてカメラにも興味を示すので、わたすと二人でネジをまわす。体の不自由をカバーするに余りあるアクティビティ（活動力）といえよう。そして、ワゴン車を利用して、なんとか二人で協力して歩こうとする姿は、「奇形」を感じさせない。

私は、この二人のために何ができるだろうか――思わずつぶやいて出たこの言葉を、通訳が主治医のグエン・ティ・ゴク・フォン博士に伝えた。

「この子たちに合った車イスを日本の技術で作っていただけないでしょうか」

「これまでにも、日本のいろんな人がベトちゃん・ドクちゃんに車イスを贈ってくれると約束してくれましたが、なかなか届かないのです。二人とも一日、一日大きくなりますし……」

私は日本人として恥ずかしい思いをした。そして二人の美しい目をみて約束せざるをえなかった。

「できれば今年の七月一～三日、日本でひらかれる学会にいく時、車イスと抗ガン剤を援助していただければと思います」

フォン博士のこの申し出を、この時はそう深く思うことなく引き受けた私を、固く決心させたのは、その日、ホテルに帰って交わした日本の商社マンとの会話であった。

ベトちゃん・ドクちゃんの写真をみせると、彼らは、「……こんな子が生きている？」と、露骨にいやな顔をした。

私は率直にいって、怒りを覚えた。

どんな障害をもっていようと、人間として生き、発達する権利をもっている。そのことを世界中の人々に理解してもらうためにも、ベトちゃん・ドクちゃんの発達を保障する車イスを贈ろう。海をこえたこの贈り物は、世界中の障害者を励ますことになるだろうし、人類の連帯の証となるはずだ――。

時とともに、怒りは、固い決意に変わっていった。

筆者の運動、実践、研究の出発点は上記の文章に示されている「怒り」「人類へのヒューマニズム」と2人の発達への願いといえよう。

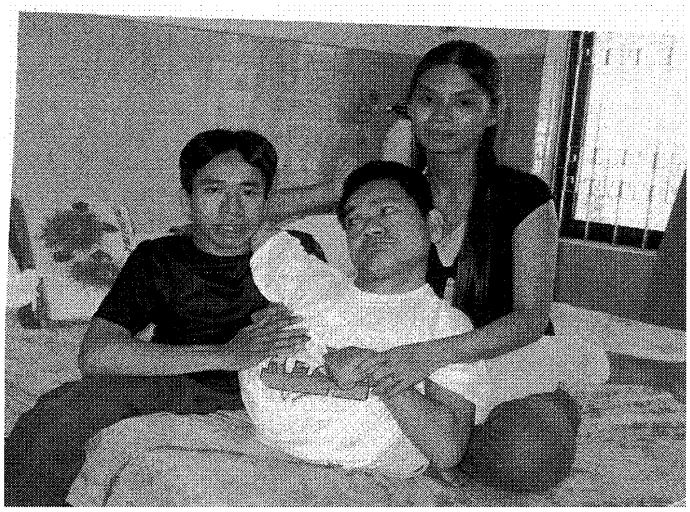
いや、筆者の場合、運動と実践があり、その後追いの中で研究がはじまるといえよう。

即ち、結合双生児であったベトとドクのための特製の車イスを送ることのために、日本に帰った筆者が「ベトちゃん、ドクちゃんの発達を願う会」（1985年6月2日結成）の活動の中で研究がはじまるといえよう。

これまで著書として①「がんばれベトちゃんドクちゃん」かもがわ出版1986 ②「cheer up Viet and Duc」かもがわ出版 1987 ③「ベトちゃんドクちゃん物語」新日本出版 1992年 ④「ベトちゃんとドクちゃんだけでなく」文理閣 1997年 などで2人の発達について述べてきたが今回は事例研究としてベトとドクの発達にまとめてみることにした。

この事例研究は単なる事例としてでなく、ベトナムにおいてアメリカの使用した枯葉剤（人類が生み出した化学物質ダイオキシン）の結果生じた結合双生児としての歴史的な必然性の中で把握すべきケースといえないだろうか。

写真1　ドクとベトとドクの婚約者のチュエンさん（左から順に）



Ⅱ　ベトとドクの発達を追う

ベトとドクは1981年2月25日にベトナムの中部高原ジャライ・コントゥム省（当時）サ・タイに生れた。この地域はアメリカがベトナム戦争の中で1961-1971年に展開した、ゲリラが潜む森林を破壊するための枯れ葉剤が大量に散布されたことはアメリカの資料からも明らかである。中村梧郎著「戦場の枯葉剤」岩波書店 1995、にくわしい。著者自身が1981年末編者とな

った「戦争と障害者―ベトナムからの証言―」青木出版 1981年 も参考になろう。

なお、ベトナムの侵略戦争で枯葉剤（約366ｋｇのダイオキシンを含む。１ｇで10万人を殺害可能。）が散布されたれた時期 は1961-71年であるが、ベトとドクが生まれたのは1981年である。しかしダイオキシンは母親の体内に蓄積されベトとドクの出産時に結合双生児の発生に影響したと考えられている②。

ベトとドクの発達に関する年表は大まかなものとして次に示されよう。

ベト・ドクに関する年表

	年　代	事　　項
	1961. 12. 14	第二次ベトナム戦争が始まる。アメリカ合衆国は「南ベトナムを共産主義者の侵略から守る」という理由をつけ、北ベトナムと全面戦争に入る。
	1961～1971	枯葉作戦実施。枯葉作戦とは、ベトナムの解放勢力への食料供給を断つために穀倉地帯の収穫を全滅させ，ゲリラ兵の根拠地である広大なジャングルを丸裸にすることなどを目的として，ダイオキシンの混入した「除草剤」を南ベトナムの各地にばら撒く化学戦争のことである。ダイオキシンは，致死毒性ばかりでなく，発癌性や催奇性においては，自然界はもちろん、人類が生み出してきたあらゆる化学物質の中でも最も毒性が強いと言われている。
	1965～1968	アメリカによる北ベトナム爆撃。(1972.4.6 に再開)
	1975. 4. 30	ベトナム戦争終結。南ベトナム政府，無条件降伏。
1	1981. 2. 25	ベトとドクが、南ベトナム中央高原のジァライ・コントゥム地区で生まれる。(出産直後　省のコントム医科大学に入院、その後ハノイに送られる)
	1981. 5	ハノイのベトナム・東ドイツ友好病院で大切に育てられる。初め、バァ・ボン（二男，三）と呼ばれていたが，病院の名前をもらって，ベト・ドクの名に変わる。
	1983. 1. 16	ホーチミン市のツーヅー病院に移る。元気で快活なベト、やや弱虫でおとなしいドク、というように性格の違いも現れてくる。
	1985. 2. 28	藤本文朗が，ツーヅー病院でベトとドクに会う。二人の主治医のフォン博士から、特製車イスの製作を頼まれる。
	3. 15	特製車イス製作のために，設計者山口光義さんの病院に有志が集まる。
	4. 22	「ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会」発足。ベトとドクのために「愛の車イス」を贈る運動を展開する。
	7. 10	特製車イス完成――手と足の力で動かせる車イス。
	8. 20	募金により、「願う会」が医薬品と市販製車イス 20 台をベトナムに贈る。
	10. 25	フォン博士が「願う会」の招待で来日。
	10. 27	三方町（福井県）と京都市で車イスの贈呈式とフォン博士の講演会を開催。
	11. 6	フォン博士、車イスを土産に帰国。

2	1986. 5. 22	ベトが原因不明の脳症にかかる。
	5. 28	ベトナム大使館から「願う会」へ医療援助の要請が来る。
	6. 11	日本赤十字病院の医師団がベトナムに向かう。
	6. 19	ベトとドク，日本に移送されてくる。日赤医療センターの集中治療室で治療。
	8. 15	「願う会」が『がんばれ ベトちゃんドクちゃん』を発行。
	10. 29	ベトの症状安定。ベトとドク、ベトナムに帰国。
	1987. 3. 30	「願う会」が、英語版『Cheer Up, Viet And Duc』を発行。
	4. 5	「願う会」が、ベトとドクが絵をかいたり文字を練習したりできるように，文房具セットを贈る。
	7. 1	2台目の特製車イス完成――ドクちゃんだけの力で動かせる車イス。
	7. 14	2台目の車イスを持って、藤本代表がベトナムを訪問。車イスのプレゼントと共に、ベトの療育プログラムについて指導。
	9. 20	「願う会」が『がんばれベトちゃんドクちゃん PART Ⅱ』を発行
	1988. 10. 4	ベトとドクの分離手術が奇跡的な成功をおさめる。
3	1989. 2. 25	分離後のドクが乗る3台目の特別製車イス完成、寄贈。8歳の誕生日に、ドクは「願う会」寄贈の松葉杖で独り立ちする。
	1992. 8. 18	日越友好障害児教育交流セミナー始まる。（以後15年間続けて実施）
	1993. 7. 28	ドクが義足で歩行できるよう、「願う会」が仲介役となり、兵庫県総合リハビリセンター中央病院で、3ヵ月間訓練を受ける。
	1994. 8. 18 ～ 28	三菱銀行国際財団の助成で、ホーチミン市ニャーベー県の不就学児・家族の生活実態調査始まる（以後3年間継続実施）
	1995. 7. 19	ドクの人工肛門を自然肛門に戻すため「願う会」が仲介役となり，三重大学医学部付属病院で手術を受け成功。
	12. 28	ハノイ市近郊で、南ベトナムで枯葉剤を浴びた兵士の二世障害児の検査・診療に当たる。
	1996. 12. 28	クアンチ省で、枯葉剤を浴びた両親から生まれた二世障害児の検査診療に当たる。
	1999. 6	ドク、ホーチミン市第10区高等職業学校（コンピューター関係）修了
	2000. 3	ドク、三輪バイクを利用し自由に外出可となる。
	2003. 4	ドク、ホーチミン市ツーヅー産婦人科病院の職員となる。
	2006. 12. 16	ドク、チュエンさんと結婚、新居をかまえる予定。

文献③参照

ベトとドクの発達を今日まで26才を区分すると以下の段階に分類できよう。

1．出生からの「健康な」結合双生児時代（1981～86年）
2．兄ドクが脳症にかかり、弟ベトが発達的には健常の状態（1986～88年）
3．分離手術成功後兄ベトは重症児、弟ドクは元気（1988年～今日）

Ⅲ　出生から「健康な」結合双生児時代
（1981年2月25日～1986年5月22日）

出生から中部高原のコントム医科大学→ハノイのベトナム東独友好病院→ホーチミン市のツーヅー病院と生活の場はかわる。出生当時のことを現在している母フェ（52才）に聞いても思い出せないとのことである。

以下のカルテは、ベトナム東独友好病院から1982年2月12日ツーヅー病院に送られたものと考えるが、筆者が1985年2月28日に二人の特製車イスを作成するデーターとして写したもので信頼できるただ1つのデーターといえよう。

「ベトとドクのカルテ」

著者が、ベトナム・ツーヅー病院で受取った、ベトとドクのカルテは次のとおりである。（ベトナムで通訳者が日本語で表記したもの）＜1985年2月28日＞

「

1　ベトとドクの病案

ベトとドクを分けるためにコントム医科大学は一九八〇年五月にベトナム東独友好病院にかれらとその病案を送った。

父はグェン・タン、年齢知らない、農民、戦兵。
母はホ・チィ・フェ、二七歳、農民。

前から平原に住んで、一九七六年ジァライ・コントゥムのサ・タイという高原に移住した。移住する前、彼らは二人の子ども一男一女の平常児があった。三年半ののち、新住地で胎児が生まれた（一九八〇年三月六日）。それはベトとドクで、二頭、四手、二むね、はらの上部が接し、へそから下へ三本の足あり。二本は長くて動くことができて、一本は短くて背後にあって動かない。長い足の二本は座骨に接し、そこに二本の脊骨が立つ。彼らは小便器管がただ一つ、睾丸が1個ある。

2　レントゲン・フィルムに見ると

1　頭骨、胸骨、二手は異常がない。脊骨はまっすぐ、下部は曲がり1つの座骨に立つ。

2　心臓は、ベトのは普通で、ドクのは下駄の形に似ている。

3　消化管は、ドクの胃は大きくて、へその上部三分の二に占める。ベトのは二割大きい。彼らは小腸大腸は別々で、バリュームを飲まさなかったので長さはどの位か知らない。肛門は一緒。

4　小便器と排尿＝二人はただ一つの男の小便器で、精液丸がない。腎臓は感光薬で写真をとった。しかしはっきり見えない。だから一人何個あるのか知らない。そして腎臓の位置も知らない。心電図でやって、ドクの右の軸が見える。ベトは特別ない。消化と排尿については、はじめに大便するとき、二人とも泣いていた。かおはあかくなって十五分から三十分ぐらいで大便をすることができた。一人に色（豚の血）のある牛乳をのませて、一人に色のない牛乳を飲ませた後、彼らの便は別々の色が見えた。三ヵ月後、大便すると二人は泣かなかった。ドクはあまいものがすき、ベトは塩からいものがすき。二人は九ヵ月になったとき歯が出た。現在（二十三ヵ月）歯が八本ある。体重について＝初生の時の重さは二・二kg、三ヵ月後二・五kg、五ヵ月後三kg、九ヵ月後七・五kg、二十三ヵ月後十五・五kg（現在――九八五年三月一日――一七kg）。

神経と精神について・よくねられる。小便大便すると二人とも泣いていた。五ヵ月になったら他人がわかる。おぼえている。ある患者は同じルームに入り長期間治療を受けた。三ヵ月後その患者は出院した。彼らはさびしくなった。三ヵ月後その患者がもどってきたとき、彼らは顔をおぼえていて、よろこんだ。

一歳になったときかれらは手舞、拍手ができた。十六ヵ月になったとき抱かれるのが好き。十八ヵ月になったときパパ、ママを呼ぶことができた。“感情”の発達には、一つのことは特別の点があった。それはベトはいつもいい感じをしてうれしい顔をした。手足

はよく挙動をした。ドクは怒りやすい。あるときは一人は寝ていた、一人は遊んでいた。

3　手術について

トン・タット・トウン博士は長期間観察研究して次のように認定した。

1　もし手術で分ければ絶対に一人は死んでしまう。
2　手術しながら、大量の血を失う。
3　生きる子どものほうは、また整形手術を受けねばならない。
　そしてもちろん障害者になる。それで分けないほうがよい。

4　健康については

普通の同じ年の子どもとくらべて、ベトとドクの体力や神経や知能などの発達は遅れると認める。

一九八二年二月に二人とも肺炎と重いはしかがあった。

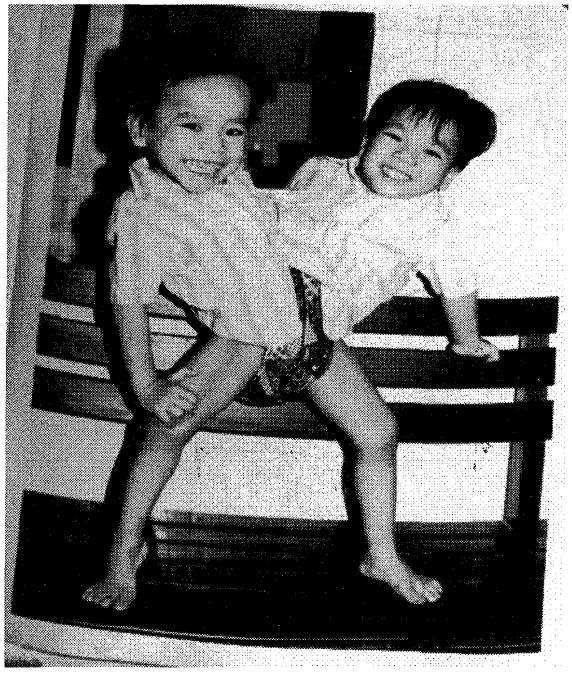
提議：ホーチミン市のツーヅー病院に転送してそこで保護する。

主治博士：レ・ラン・フォン

主任科：教師　トン・ドク・ラン

（一九八二年二月）　」

写真２　３才のベトとドク



このカルテは、81.2.25生まれて以後、主としてハノイのベトナム東独友好病院での2人の主治医がフォン博士が（ツーヅー病院）に送ったものでベトとドクのハノイ時代の約1年の治療のなかでの経過をふくめての医学的診断などが述べられているといえよう。

ここでふれられてない家族のことについて筆者らの調査を追加したい。

母はシングルマザーでベトとドクが生まれた後びっくりして逃げたといわれていたが、その当時母は、中部高原で二人を養育する自信がなかった。ハノイ、ホーチミンの病院時代も連絡がとれず、1988年の分離手術の時に日本のマスコミのサポートでホーチミン市のツーヅー病院にきてベトとドクと対面した。今日まで病院で姉とともに働いて今日に至る。

ハノイのベトナム東独友好病院時代は全体として健康ではしかと肺炎にかかったていどで死線をこえることはなかった様である。

筆者がベトとドクのツーヅー病院での最初の主治医であるグェン・ティ・コック・フォン博士、ムオイ担当看護婦、母親、本人のインタビューでまとめた健康な結合双生児時代の2人の発達を表にすると以下のとおり。

表1　ハノイ時代

年月日 （年齢・月齢）	ベト・ドクの発達の経過	備　　考
1981.2.25 （0歳）	ザライコントム省、サ・タイにて誕生。直後コントム医科大学に入院	
1981.5 （0歳）	ハノイのベトナム・東ドイツ友好病院に移送される。 体重2.5kg	
1981.7 （0歳）	体重3kg 同じ病室にいた患者を覚えているなど、他人がわかる。	
1982.11 （0歳）	体重7.5kg 歯が生えてきた。	
1982.1～2 （0歳）	二人であお向けに寝るしかないので背中がただれてたいへんである。	ベトナム・東独友好病院　看護婦記録
1982.2.12 （0歳）	元気快活なベト、やや弱虫でおとなしいドクというように性格も違いが現れてくる。	
1982.2 （0～1歳）	二人とも肺炎と重いハシカにかかる。	
1986.6 （1歳4ヶ月）	拍手ができる。	
1982.6 （1歳4ヵ月）	抱かれるのが好き。	
1982.8 （1歳6ヶ月）	パパ、ママと呼ぶことができる。	

文献④参照

表２　ツーヅー病院時代

年月日 (年齢・月齢)	ベト・ドクの発達の経過	備　　考
1983.1.16 (1歳11ヵ月)	ホーチミン市のツーヅー病院に移送される。 生後23ヶ月。 体重15.5kg 歯が8本ある。	
1984.4 (2歳)	言葉で排泄を訴えるようになる。	
1984 不詳 (2歳)	ベトが動く一方でドクは引きずられ，後頭部の毛が擦り切れる	
1985.3.1 (4歳)	体重17kg	
1985.3.2 (4歳)	言葉は普通。 数はよくわかる。 手はよく使える。 字は書ける。 知的な発達は正常である。 物を取りあったり，喧嘩をする。 ベトはやんちゃで遊び好きで果物が好き， ドクは勉強好きで甘いものが好きと性格の違いがある。 皆があまり写真を写すので“恥ずかしいから嫌だ”，“まだ時間でない”などと，反抗的ともいえる自我の発達の成長を示す行動がみられる。 一人が病気になるとたいへんである。 「この体恥ずかしい」と言ったこともあるようだが、そのことを悩むまでにはいたっていない。 歩行への努力がみられる。	グェン・ティ・コック・フォン博士ら医師団の解答と筆者の直接の観察による
1985.9～10 (4歳7ヵ月)	他の子どもと交流を始める。 英語とフランス語で1から10まで数えられる。 文字も少しずつ書き始める。 人見知りをするようになる。 ドクの心臓肥大が心配である。	グェン・ティ・コック・フォン博士の証言による
1985.11.22 (4歳8ヶ月)	体重が半年で17キロから18キロに増える。	正村富男牧師の話による
1985.12 (4歳9ヶ月)	ムオイ看護婦の証言によると4歳以降に， 結合双生児であるという認識が出てきた。 4歳以降になると，ベトがドクをかわいがるようになる。 4歳以降，二人でどこかに行く場合には相談をする。	
1986.2～3 (5歳)	60ヵ月のとき２人で歩き出す。	

文献⑤参照

以上2人の健康な結合双生児時代のデータを表にまとめてみたがハノイ時代は筆者自身がベトナム東独友好病院の主治医看護師に直接あたっての調査でなくツーヅー病院の主治医や看護師を通しての間接的なデータである。

筆者自身の目でみたのは1985年3月初旬の1週間とそれ以後の何回かのベトナム訪問を通してである。この当時二人の母代わりになっていたムオイ看護師からの日常的な行動についての関係のデーターも役立った。

その他二人を追ったジャーナリストの鶴田育子氏からの情報も得た。

2人の発達は0才から5才、ベトが脳症にかかるまで（1986.5.22）は、ひとりひとりが「健康で」あったといえよう。

ただ3才、4才ごろより双生児といえ2つの脳を持つ以上自我の発達で矛盾も出てきていることがうかがえよう。

Ⅳ　結合双生児ベトとドクのための車イスづくり

前述した様に1985年3月2日著者がベトナム留学中（文部省短期在外研究員）ツーヅー病院で結合双生児のベトとドクのための車イスがほしいとの要望に応えて、その1週間ツーヅー病院に通ったのは基礎資料をつくるためである。

院長室にきてもらったベトとドクは、チャメ気十分で、一組の足と片方の手のささえで、敬礼をしたり、ピストルを打つまねをする。不自由な体を感じさせない体の動きと柔らかさを持っている。私にはベトナム語が十分わからないが「チャオ・ガイ・スー・ニャットバン（日本の先生こんにちは）」と、かわいい目をむけ、話しかける。

ベトよりドクの方が、多少力が弱く、いつもドクの体が下になることが多く、頭の側面の髪の毛がすり切れている。

頭と体は二つ、手は二組、そして性器、肛門は一つ、足が一組である。足の動きをみて、最初は、二本ともベトちゃんのものと勘違いした。というのは、あまりにもワゴン車で足を使っている二本の足の協調性がスムーズで、ベトの足が片方、ドクの足がもう片方とは考えられないほどだからだ。

誰もまねできない二人三脚といえよう。

だが、どうしても、もどかしさが目立つ。手の操作への活動力が高いにもかかわらず、足の不自由さが制約を加えるからだ。安定した人間の体位がとれないことを克服するためにも、車イスが必要だ。

私は、車イスづくりに必要なデータとして、体・手・足を実測し、さまざまな体形での写真を五十枚近く撮影した。

両者の長さは少しづつ異なっていた。ベトの首から腰（胴）が四〇センチで足が五一センチ、ドクの首から腰（胴）は三八センチ、足が四九センチ。ベトの手は二九センチ、ドクは三〇センチだ。ベトとドクとの間にあるダイコン状の突起物は足に発達しないでいる体の一部で、三〇センチの長さがある。

筆者は日本にかえり、この特製車イスづくりのため物心とも支えとなる運動団体「ベトちゃんとドクちゃんの発達を願う会」をその年の5月結成し、資金あつめの活動をもはじめた。

同時に日本の障害者の人々の協力のもとで結合双生児ベトとドクの特製車イスづくりの実践に取りかかった。

発生学的な見地②からの結合双生児の研究はいくつかあるが、その子どもたちの車イスの研究というと全くない。

筆者は当時の二人の発達上の特徴を次のようにまとめた。

①形態的に前述した「奇形」があり、多少ドクに心臓の弱さはあるが、日常生活はいたって健康である。
②精神発達の上では、遅れは出ていない。活動力は子どもらしく高い。二人はけんかもするが仲もいい。
③二人の自我発達のなかで、けんかが生まれ、「この体、恥ずかしい」と言ったこともあるようだが、悩むまでにはいってない。
④体、手足とも柔らかく麻痺などない。体は柔軟に動ける、いわゆる子どもらしい柔らかさをもっている。ワゴン車の利用など、手足は器用である。
⑤しかし、体位が人間らしい安定した形でないため、たえず体位を支えるためには手が必要となっており、一般の子どものような手の自由な活動が奪われている。

それゆえ、手の操作の点で（例えば書く、描くなど）

精神発達上のひずみが出る危険がある。

⑥歩行への努力がみられ、何らかの支えさえあれば、一組の足が歩行にむけて役立てる方向が考えられる。

⑦年齢的にみて、自我の発達のなかで、ベトとドクが、活動上協力する体制が生活上不可欠になっていくが、両者が体形上矛盾することが多い平面（ベッドの上とか）活動より、車イスでの活動の方が、二人の協力関係が生まれやすいと考えられる。

そして、車イス生活で、車イスの改造の特許をもつ山口光義を中心に「願う会」の力でできた車イスは写真３の様なものであった。1985年10月に日本を訪れた主治医のフォン博士がベトナムにもって帰られる。

写真３　５才のベトとドク

そしてベトナムで、ドクが脳症にかかるまで半年のみ利用された。その利用状況をくわしく聞く機会がなくて今日に至っているが、歩行補助具と遊び道具的利用にとどまり手の活動に役立てるに至らなかったと考えられる。

V　残された課題

以上「健康であった」結合双生児時代（0～5才）の事例研究（1）としてまとめたが、まとめてみてまだまだ残されたことが多いのに気づく。①母親（フェー）の体内の血液のダイオキシン濃度測定は、医師が国際法上治療目的でなく検査することは望ましくないとの理由でできなかった②ベトとドクは一卵性の双生児と考えられるが医学的にたしかめてない③それとも関係して2才、3才でベトとドクの排便、睡眠などのリズムで矛盾が具体的に出てこなかったか④出生日があいまいである。など聞きとりが不十分である。

文献

①ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会編『がんばれベトちゃんドクちゃん』かもがわ出版 1986

② MOORE PERSAUD 原著 瀬口 春道 監訳『受精卵からヒトになるまで 基礎的発生学と先天異常』医歯薬出版 第4版 2005年 121.pp

③藤本文朗編『ベトちゃんドクちゃんだけでなく―日越11年間の国際交流レポート―』文理閣 1997

④藤下亜香「ベトナムのある結合双生児（ベト・ドク）の事例研究」『藤本文朗退官記念論文集―座して障害者と語る―』文理閣 2000年

⑤ TRAN TRONG THUC MINH THU「VIET-DUC TINH HGUOI」1999 NHA XUAT BAN TRE.

（ふじもと　ぶんろう　本学教授）